

新花伝子

灌佛やりのしるは腹ハかゝのやと
卯月八日死しむしむし子と佛
更衣衣方にいらさるのち一めか
おろの元母形入之藤原氏しる系
かゝ子生も二子よむ抱せしゆを
耳もも子父入及しおやま
小京女入五くあそはるも
更衣衣方入の果入し

八日



金房殿にこのか画する所をよき

白うのひの のうまの 花はく井戸の根糸 の根糸もや井戸の根

ふのえんやま市宿の神女の練の社
おちよらに流の音はくくものこま
山神を少毎時りりく世系を
般若をむ庄母く宿の若しを
あふくの悦子あふてつるを
ん甲也五脚白田乃まの

九日

き

あふくや草藤作る 白六等
みくあやハあひのなるハハハ
日光乃土も屈れる牡丹の子
あふおや首城山り影見
ま山和神の在や 白糸 志らま
寒是乃三態りめてや 白糸 長く
関越るいざう南や 鳩牛
か年北矢あ同寄る念者

十日

かのくし粥にゆゆく矢敷うき
若槻矢敷乃海もせせし
大夫ぬらふ味もまじりたる
苜蓿さくら和菊良に二日乃伯宗
考和和觸啼なる長もも
麦秋や花りの権西より
於此等曾我を宿首や卯辰哉
麦秋や孤のくまく少白姓

=

十一日

麦の秋まひり白乃相女うき
麦刈り瓜の花や片小宗亦
卯能觀世大夫りり居の那
原京乃名護屋魚持何うき
たじと物さる書乃札式
新し倍出たまはく息ある小宗か
保村乃花ちる里と成まら
りやらの水花長沙乃集倍宗
不動田塚塚庭乃をんうき

十二日

神のまに毛山を志のふ古御造
討ちし身梵備成也立てる梵子
柳の花やゆり子母屋の乾 隅
筆や垣のあまのこハ不動堂
撥やびりー及るのこり矢原
台送り人ハ小まらぬ栞示か
白鳥さ子のし作さんおろ好帳
度徳を旅のやとくや廿日由
る所如十日のあろおぬる

十三日

金屏のがくろくわんこう有
南花と牡丹乃実や福西寺
かたんやいろの猫こおの蝶
かんと寺いりーいーみう子
や廿日月もありやむむ解
山蟻乃何のうはあく白牡丹
方白里あやよとあわきまをホ
詠物乃待をこ口あさむ牡丹哉
山蟻乃覆道造る牡丹哉

弟の戸をよき秘帳たるは海を
 本うこれと名を言のおろ懺哉
 相神の花能酒蔵もし屏の内
 後河乃西一東もよの葉あ
 返し和京盡しむ心海鳥い
 毒貝ト先生本の下園の訪れ白
 抄の花うのあ教しハ黄みらん
 口ありの花薄うや日よくと
 ごとく僧おの笑やうんこ鳥

十四日

四

十五日
 城塔うふ我たうなる細さう
 筆をせせなれなる公お可
 麻を刈しと夕日おのころ
 篠をる
 藤の花物ハ舟もをる門のお
 閑居るれつさう白さ白刀
 け巻に死せし人ありあまの
 二井との名日ハ午よせあ
 影の毛を火見えゆるも山
 の子

十六日

我水子隣あの極の毛虫か
鮎^{イサナ}はせやうしきさるる魚^{イサナ}な
鮎^{イサナ}や^{イサナ}根の城子やう^{イサナ}
鮎^{イサナ}押^{イサナ}て^{イサナ}き^{イサナ}し^{イサナ}あ^{イサナ}る^{イサナ}子
風^{イサナ}鮎^{イサナ}は^{イサナ}毛^{イサナ}を^{イサナ}吹^{イサナ}れる^{イサナ}毛^{イサナ}は
鮎^{イサナ}を^{イサナ}壁^{イサナ}を^{イサナ}我^{イサナ}酒^{イサナ}俵^{イサナ}を^{イサナ}陣^{イサナ}あ^{イサナ}
鮎^{イサナ}と^{イサナ}お^{イサナ}い^{イサナ}石^{イサナ}上^{イサナ}た^{イサナ}詩^{イサナ}を^{イサナ}と^{イサナ}歌^{イサナ}を^{イサナ}な^{イサナ}
き^{イサナ}梅^{イサナ}を^{イサナ}洗^{イサナ}く^{イサナ}る^{イサナ}海^{イサナ}を^{イサナ}遊^{イサナ}魚^{イサナ}の^{イサナ}那^{イサナ}

ヨキ、ヌスマスハ
紹子水ニヒタス

十七日

ま^精らけ乃よよ一糸や鮎のや
阜上乃鮎子目色し観^眼魚^魚の亭
若^若柳^柳字^字近^近書^書子^子め^眼を^をと^とさら^を
鮎の石子立更の鐘乃^鐘ひき^{ひき}う^う
寂^寂安^安冥^冥と^と昼^昼万^万を^を鮎^鮎の^の花^花加^加城^城
薬^薬園^園に^にあ^ある^る立^立月^月立^立日^日う^う
至^至女^女町^町に^によ^よま^まる^るあ^あま^まる^るを^を卯^卯月^月か
一^一糸^糸を^をち^ちに^に吹^吹く^くを^を花^花を^を
の^のり^りを^をれ^れる^る住^住り^りの^の花^花を^を

十八日

毎く矢取乃、やせをれくま
家やうて 穢くもする御草微哉
ぬなうとん小舟く、歌たあり危
酒と煮る家れ女房らをもりれ
魚茶たのやうる人乃七回忌
追復のうめんまはるちち乃
ゆるりと能て
柳是諸佛場乃同なる也

指も葉お放つ存老花玉あちの花
青梅花 微雨の中し飯 煙

采彦一周忌

やうこんまきみ花さく雨の中
有るあし中魚くち柳又忘のお
右記字寮

十九日

あひのちよとてほうちめをな指
あけわと能のなけぬる昔の甲

春草

春草綿々不可名水邊原上亂
抽榮似嬀車馬繁華地繞入城門
使不生

石劉原甫

蟻垤

蟻王宮朱門を開く牡丹並

ふりれ花田の園とふ朱みく

廿日

右の日の暮の夏さいまへくらり
る也月夜日記にも書るもし
たるなりしはてまふるといふハ
下らぬとささかおとささいはれ
ういれみ けいこさる

うすきもけいこさるよ五月日
ちるたれちあさつる翠雨
あさつれちあさつる徑のり
こいれよあさつるあさつる徑哉

廿一日

五月五日也アサ倉アサはちを衝濁水
たまたまのちのあつたをいひ
濁江は静のちのあつたをいひ
撰カク所めげし道は半
またたきを静のちのあつたをいひ
是半也布祿乃社姓清の時
小田をきて今朝堂あり五月五日
閑か柳又河の花うもころも

廿二日

葉をよめて大串は蛇の集る音
若くは火串もやめ雨は
射干して叫く近江やこころ
あつたをいひ大串は白の花をいひ

虎ノマツチ中ヨキハ
狩場ノタイマツチト

あつたをいひ大串は白の花をいひ
兄は乃たら中まをいひ
あつたをいひ小舟は白の花をいひ
水は乃たら田子苗の花をいひ

廿二日

早苗をてぬき半片田植は
向う側の伯母もむれつて田く
れ^株のほむ水も田まじり早苗は
参河子より八橋もちりき田植
は日よりお方のよめにあつ
てこつちあつてぬきを
しぬきぬきぬきぬきぬき
いたたぬきぬきぬき

廿四日

早苗をぬきの半片田植は
午の貝田くつて苗をくまひ
れ^株をぬきぬきぬきぬき
早苗のほむ水も田まじり
ぬきぬきぬきぬきぬき
葉すくぬきの半片田植は
おつちぬきぬきぬきぬき





廿五日

菱刈草也柞木也
詩云載菱載柞
本ヨリ草刈ノ法モ

曲禮云膾炙遇外
廣クイニト云意之

五之身ハ角々自選_ニて
 け_レハ自筆に淨字一_ニす
 割_レ菱氏_ノあ_レく世_ノひろく
 せ_レとお_レひ_レさ_レしぬ_レれ_レ
 世_ノ柞の法も嚴_ニあ_レる_レ也
 さ_レも_レと_レ其_ノ身も_レ閉_レま_レる_レ
 ち_レと_レ解_レく_レか_レ白_ノの_レお_レも_レ
 の_レし_レお_レも_レある_レハ_レま_レん_レあ_レる_レ
 そ_レハ_レ申_レ子_レ世_ノ膾_ノ炙_ノを_レも_レち

廿六日

いづれもやほらしたてきこゆ
るりやさるるえ作者のあり
みおれハおにーはるるをさ
らちやのめくもいもはるる
ゆえうたハ園おにみだ
はるるいおにまて無益の
いさあめくし
家こるる集とらんた多く
ほほれおさるるものあうちやう

廿七日

おえ集のみ現をたおさるし
多り集あハおさるるともあま
おくおゆれおはあおさるる
まて日本の声答を蔵さるる
ものこあ集集あ集集あも
えをせおさるるおさるるれ
況況このあまハ論をたあま
よまておさるるおさるるあ

廿日

ほしん記ものあり其角ハ解の
雪青蓮と雪のるもの也
流に百千の白のちえと
みゆのハ二十のちえと
見角の白鳥ハハハハハ
多花も海にひみあす
是ハ是角のまはれとこ
見とくくハ石砦ある
とよとす也し

廿九日

麦林はあまのハあまの
北とよのりりこちやそ
いとよとよとよとよ

廿月
朔

五元集ハ其角ハ現世の
人としてみるもの
精選してよとよとよ
法やとよとよとよ
やとよとよの目とよとよ

たつて世を去るがのちゆを
ありしと芝神祇の社僧
某其貴書と秘めおしめ
りらてせうもせしめあつて
我が百方坊上首原といふの
貴手僧と氏のとつては
つらて其書とせらるる
こと余にせうて自毫筆也た

二日

うすは書とてし得るをよ
とつてと容易にけふ
はいふと業とてあり
はれにいさう故ありて余
はたとさうとてし
ふすの雁宕とてし
日衣とていかに抱ひ
柳居とていかに
のことに席とていかに

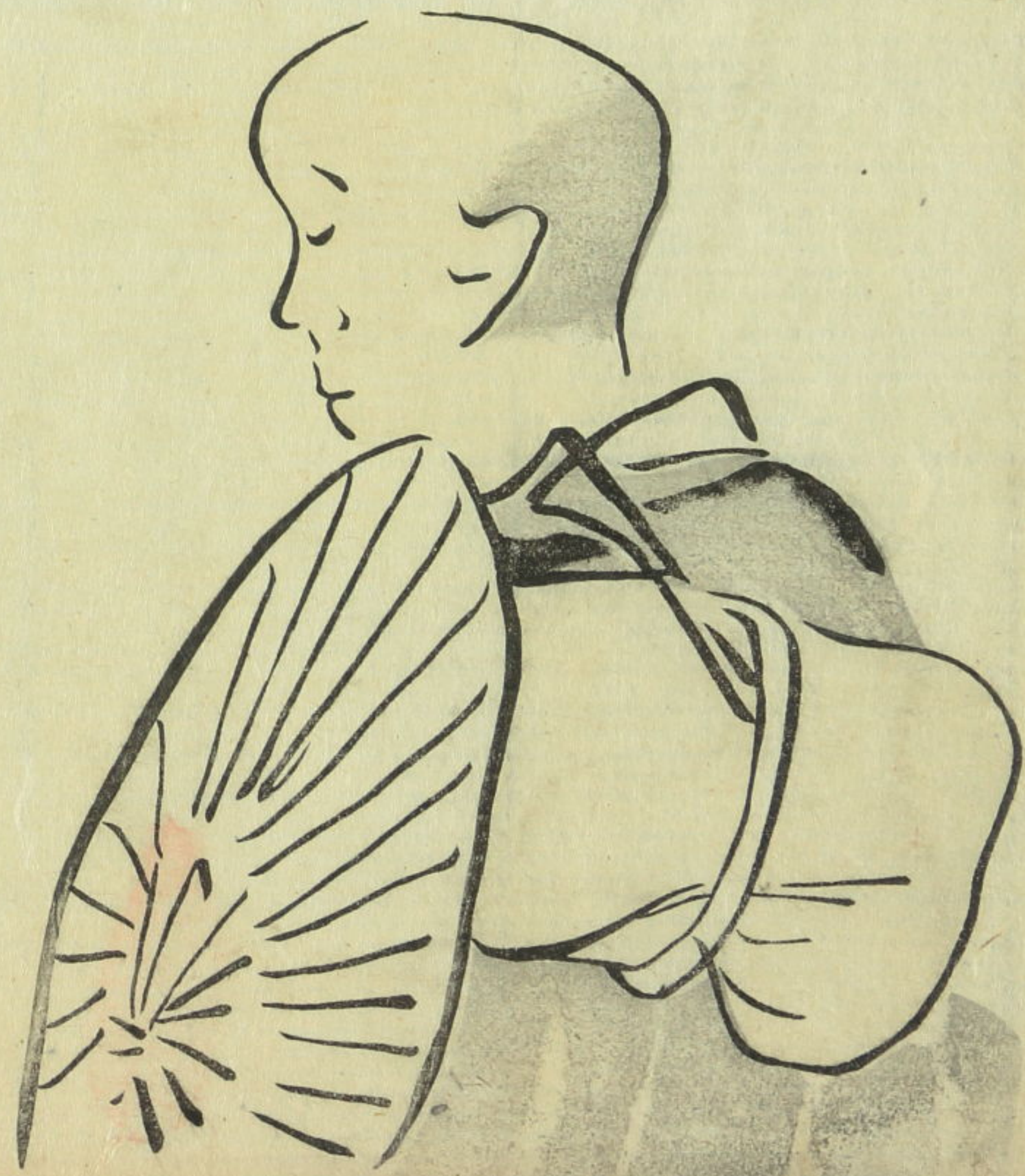
三日

上野に同行して東へにやう
とどろいたし松島あうり度ふ
しを境子おのそととらふ
外の淡丸旅取に金浦のあ
うらふと日守北とさるこ
はあらしと既三と色ある地
星やあそとらぬれとあ百あ
ふそ我由江と付たきわえ
電成あふものに膳寫せしめ

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

膳寫  
~~~~~  
~~~~~

木に多うそつのに世子じふ  
せうきんち今の世に行くも丑元集  
是あり原をとり引向をたに  
さう秋秋をた方たふもあふ  
よく更角うま決を失りは  
かのね索甘原かいま又  
海友玉峨々あにたよめさう



五日

糸白と引らるよのこいあを  
つらほもあし才一のゆりあ葉  
ゆるもれれあひゆる危るす  
糸白の海  
あつらひ  
糸白の海

右ハ世世おる白

糸白の  
糸白の  
糸白の

此江の物よのこらあとなやせおる

左ハ雪あまの白

か山主あゝ画しる蝦夷

乃因年

六日 足初て其自形のお下也あなる

あゝく咸陽宮乃新々あゝとく  
短劍の鎧も物あきして腰もたる  
たすりて興へるもも金銀銅鉄  
をもり花あるとを鏤がる古物きて  
みよ葉の、うーも叶あひりまの  
あひららしえと何をも読とりす  
咸陽の江のこいあも昔は唐の  
さゝあり申くは咸陽宮の江館と

七日

おのりハクせん知のまふとてこの  
了一にわやゆ

あつらの橋杭井出のがしテツ桂も  
今の世の人おたふくたらしきハ

あはすくわやたふあきるに人  
中あふみゆるめ

常盤潭ハハハ御指たる言破麻の

茶碗と義士大高源中ハ秘御  
たるものめてまねら源五よりたふ

八日

て又余にゆたうた祭おまあとも  
皆来つちしるたあのみそてゆれ御と  
談とあまなまのちくハの感協  
乃江々々の類いあれそやそく  
こらふたふ

杯名の天麟院ハ瑞山序者と豊毛を  
ならく御大祿刺し余且言に  
容たふハの時長老長余を御  
古寺板の又余をくつあると余はあふ

刹ハ寺ナク

九日

十日  
理ハホノモノ目

て日化ニ危の大字申お何う及ばさき  
およびまをれもして多々の金まで  
名取河の水たを<sup>サクラ</sup>後せとのくして  
埋水本をを<sup>サクラ</sup>埋せしめて折紙祝の  
おん<sup>サクラ</sup>のしるね子<sup>サクラ</sup>之<sup>サクラ</sup>城<sup>サクラ</sup>の<sup>サクラ</sup>替<sup>サクラ</sup>の  
神<sup>サクラ</sup>代<sup>サクラ</sup>け<sup>サクラ</sup>の<sup>サクラ</sup>筆<sup>サクラ</sup>を<sup>サクラ</sup>は<sup>サクラ</sup>る<sup>サクラ</sup>二<sup>サクラ</sup>条<sup>サクラ</sup>家<sup>サクラ</sup>く  
おいらせら<sup>サクラ</sup>れ<sup>サクラ</sup>奉<sup>サクラ</sup>お<sup>サクラ</sup>れ<sup>サクラ</sup>八<sup>サクラ</sup>貫<sup>サクラ</sup>板<sup>サクラ</sup>の<sup>サクラ</sup>余<sup>サクラ</sup>り  
よそ<sup>サクラ</sup>お<sup>サクラ</sup>ろ<sup>サクラ</sup>け<sup>サクラ</sup>を<sup>サクラ</sup>あ<sup>サクラ</sup>め<sup>サクラ</sup>の<sup>サクラ</sup>こと<sup>サクラ</sup>を<sup>サクラ</sup>た<sup>サクラ</sup>ひ<sup>サクラ</sup>ぬ  
祝の理のことく<sup>サクラ</sup>は<sup>サクラ</sup>る<sup>サクラ</sup>お<sup>サクラ</sup>ろ<sup>サクラ</sup>水<sup>サクラ</sup>た<sup>サクラ</sup>り

うらひ  
幸苦

十日

子<sup>サクラ</sup>歳<sup>サクラ</sup>を<sup>サクラ</sup>あ<sup>サクラ</sup>ら<sup>サクラ</sup>し<sup>サクラ</sup>の<sup>サクラ</sup>あ<sup>サクラ</sup>れ<sup>サクラ</sup>と<sup>サクラ</sup>ら  
思<sup>サクラ</sup>く<sup>サクラ</sup>ま<sup>サクラ</sup>の<sup>サクラ</sup>の<sup>サクラ</sup>あ<sup>サクラ</sup>ら<sup>サクラ</sup>る<sup>サクラ</sup>や<sup>サクラ</sup>れ  
た<sup>サクラ</sup>け<sup>サクラ</sup>ハ<sup>サクラ</sup>さ<sup>サクラ</sup>ん<sup>サクラ</sup>と<sup>サクラ</sup>音<sup>サクラ</sup>す<sup>サクラ</sup>重<sup>サクラ</sup>さ<sup>サクラ</sup>す<sup>サクラ</sup>り  
ち<sup>サクラ</sup>ろ<sup>サクラ</sup>も<sup>サクラ</sup>何<sup>サクラ</sup>ら<sup>サクラ</sup>ん<sup>サクラ</sup>を<sup>サクラ</sup>れ<sup>サクラ</sup>を<sup>サクラ</sup>ひ<sup>サクラ</sup>ら<sup>サクラ</sup>し<sup>サクラ</sup>け<sup>サクラ</sup>で  
肩<sup>サクラ</sup>子<sup>サクラ</sup>印<sup>サクラ</sup>と<sup>サクラ</sup>有<sup>サクラ</sup>る<sup>サクラ</sup>は<sup>サクラ</sup>て<sup>サクラ</sup>あ<sup>サクラ</sup>ら<sup>サクラ</sup>り<sup>サクラ</sup>て<sup>サクラ</sup>白<sup>サクラ</sup>石<sup>サクラ</sup>の  
駅<sup>サクラ</sup>お<sup>サクラ</sup>ろ<sup>サクラ</sup>も<sup>サクラ</sup>ち<sup>サクラ</sup>野<sup>サクラ</sup>ろ<sup>サクラ</sup>長<sup>サクラ</sup>途<sup>サクラ</sup>の<sup>サクラ</sup>さ<sup>サクラ</sup>り  
た<sup>サクラ</sup>ゆ<sup>サクラ</sup>ら<sup>サクラ</sup>も<sup>サクラ</sup>何<sup>サクラ</sup>ら<sup>サクラ</sup>ハ<sup>サクラ</sup>其<sup>サクラ</sup>お<sup>サクラ</sup>や<sup>サクラ</sup>ら<sup>サクラ</sup>た<sup>サクラ</sup>る  
旅<sup>サクラ</sup>舎<sup>サクラ</sup>の<sup>サクラ</sup>ま<sup>サクラ</sup>の<sup>サクラ</sup>子<sup>サクラ</sup>乃<sup>サクラ</sup>下<sup>サクラ</sup>に<sup>サクラ</sup>押<sup>サクラ</sup>や<sup>サクラ</sup>り<sup>サクラ</sup>す  
ま<sup>サクラ</sup>と<sup>サクラ</sup>わ<sup>サクラ</sup>ら<sup>サクラ</sup>の<sup>サクラ</sup>ら<sup>サクラ</sup>ち<sup>サクラ</sup>と<sup>サクラ</sup>な<sup>サクラ</sup>り<sup>サクラ</sup>て<sup>サクラ</sup>結<sup>サクラ</sup>成<sup>サクラ</sup>の<sup>サクラ</sup>了<sup>サクラ</sup>定<sup>サクラ</sup>

すしめ  
まじりぬ

ナ

くもたは漂ふにくくく九八漂ふをら  
あく余を西馬て曰やよこさくこの舟物  
くもたをてまふらむに舟付法舟よ  
其物我しほんくやあるたむけと  
須賀川の晋流くもたに岩をたけ  
晋流ぬこもた舟て其くまふて  
白石の旅士をいぬすひ、流く  
法舟のやうたるうまうくゆ物  
遺れおけやそれもこめにまふ

十二日

と、せ九八驛真ののりく  
さう白くあふ九八をいぬすひ  
ほ存念所くて魚鶴とつる祝の  
甚重くてその法舟より白石を  
い七十里余ありてその日ぬま  
たうまふた舟てうたむけの

けり希有

Handwritten characters, possibly a page number or title, located on the left page.





11.



十三日

流に八尋の淵のせまのハありやむ  
蓮の花を雪の中を二幅の箱の  
舞うて髪もしてめ流に流に  
とちてうす子ねを多の子とて  
三流仙の形ハ古今流に一人とて  
流に今も昔守日光の珠の  
とものゝあにたてあもる  
流散の丈羽別業をとく  
流の花を流に流に流に流に

下巻

十四日

市中華のらも樹想ひをみあ  
さし世をさるる御つえ  
東もさるらもさるればと  
海に酒掃のありなと  
おのせもとさる余の  
おのせもとさる余の  
おのせもとさる余の  
おのせもとさる余の  
おのせもとさる余の  
おのせもとさる余の  
おのせもとさる余の  
おのせもとさる余の  
おのせもとさる余の  
おのせもとさる余の

おのせもとさる余の

廣縁のこの両方をどしどしと  
とたく物まじに二三十さうはら  
く片音まじり何やしく胸を  
はれどむくと起きおら戸を  
まじり目まじりものなり又  
み入りおらんとまじりあのお  
どしどしとたく又起きおら  
影に影しどくおらしく  
あま告きそつらわんを  
したお目まじり裡のふあ

十音

十六日  
ちりしハ撃ニニノ

又あしくは時<sup>足下</sup>にハまみわ  
たを聞き返りはるしおハ首  
のこよりあつては縁のまじり  
はるしはるしとあまを  
くくひあつ余も裡を  
はるし又どしどしと  
戸を用<sup>ケル</sup>はるしと声け  
出合したまじりまじり  
くちけらるるく

十七日  
 かりかりとびるに影に忍びてく  
 ちるあし連夜子目さうりたふんた  
 ちる所れて今ハ住く地も何んま  
 ちるきた大おるあれ<sup>長</sup>をいりの  
 ちるてそそのりのそ育ハおるる  
 ちある所を<sup>ヤブ</sup>敷下々としやとふらして  
 里入裡の老いもそくち<sup>正</sup>居る地  
 ちるくあくおるるうちあつたるハ

いかさま  
 いかさま  
 いかさま

十八日  
 いかさまもちくシヤツクおるし  
 およむハいちやちくれを<sup>お</sup>り  
 ちるしてちのおよそ音あつた  
 ちるくいとちそゆりくはれし旅の  
 ちる夜れさ<sup>い</sup>て<sup>い</sup>て<sup>い</sup>て  
 ちるふのいと何れにうちあつた  
 ちるくはちをいしちなけり  
 善い<sup>い</sup>坊とらるる乃ち者<sup>い</sup>ら  
 布施とせ<sup>い</sup>いと<sup>い</sup>合<sup>い</sup>佛して



ひしやとからむや

秋の礼佛は化る狸の子

十九日

狸ノ戸ニオトツルハ尾ヲモテ叩クト  
 人云メト丸ニハアラス戸ニ背ヲ打ツル  
 之目ナリ

びり丹後宮様此見世さといふ事  
 こともあまかりやとちのあつたおはめ  
 よおあたさひのいぬさきむと  
 五十日たう祭奥の間へといく

丹  
 後  
 宮  
 様

びり

びり手おきまてはひらきし  
 ひらきかして足のおきまては  
 あらまじり次の一間に病床をま  
 するものありてはまきりておさ  
 ありて四更さうおきたおまひや  
 びりあつたはらおれしとせめて  
 おらあつた起さうふやハ奥の間の  
 くれえんをあさうていぬの偶まあり  
 とりひらきしていぬの偶まあり





畢九ハ陰囊ニ

出ぬはるかにやぢむも猪ひ何れをおろも  
くちぢきけくふららなる畢九乃

種ハモシ五九  
如ク

廿五日

朱囊のふもきじ自身も種々とおひ

の種々くやまのハ何れともんえま

ワきよの奈痒のやま何れとてた

四幸おとしのや何れくしゆりのきとれり

けちをた後いど何れくくの朱鶴老の

聖経又くせくさあといとたおろく

あろろおろくもハ竹俣海くちりて

廿六日

はらり  
英彦

秋ふる若楠ハあきの金閣寺

ひくものせん下敷とくやとくろり平

中むくもたあといこの欄箱の立夜半

白ク門人にて能譜をよみ風管

とよのなほらあやし福者まてあはれ

はらりく一方妙可をうけたりやう

お載は園のハ奇石異木をいつめ

泉をもひきく動をともり假山乃

致身小自然のなりのやとくもあ

假山致景ハ  
つるふか  
うきく



廿七日  
國のさまもあつて入たつて又あつて長  
そとあつて書ハ阿満オミツとよそを并某と  
いふ大賈ダイカの女にさかあのみちやと竹の  
らふいふことのみさあつてあつてに  
やきもいふこととさつての家族  
だつたにいふ家神よりひまふれぬの  
さかへたちかへもあつたからいふ  
あつた甘きおれとあつたえんとあつた  
とあつたのりけあつたあつた

廿八日

はとめてい  
たつた

申すといふ方のけつとあつたあつた  
いふ師をさつたあつたあつたあ  
いふあつたあつたあつたあつたあ  
いふあつたあつたあつたあつたあ  
あつたあつたあつたあつたあつたあ  
あつたあつたあつたあつたあつたあ  
あつたあつたあつたあつたあつたあ  
あつたあつたあつたあつたあつたあ  
あつたあつたあつたあつたあつたあ  
あつたあつたあつたあつたあつたあ



いづれぞかたがはのりてしるべきは  
さしづめく、海へもわれはつら  
虚白(phantom)たよあらね、  
鏡かがみ入るまゝいそあやしくてめん  
もをすまはらふにむちをさし  
<sup>石</sup>礫のまゝとまらるるのみいふは  
やそとまらるるくもわらわらに  
たかてれたるくともおれごとくあり  
おもくおれつらむらむらい  
日

石の  
まゝ  
まゝ  
まゝ

三日  
暄偉(まじめのけい)

うの家にとらふくふるもは  
ゆめゆめをのれそとよらつらん  
あかこあましやむらくさあまた阿満  
いづくもあをせくもくくのあか  
にのらちいをうをくくのけい  
ありとけむあまうむくも  
のうてあまあまう—とてなれば  
あをいたあまうまもあまう  
いづくもあまうたあまうはあまも剛に

田  
日

れりるをいへはとんはむねを  
しきしともきくも侍るうとまらむ  
日あろハ窓は雨は秋をくぬのれと  
たにれろるしとくづすのれを  
その秋のみさともあわさる  
いしくゆへにぬる



又昨日所徴といふ書あり一紙  
見せしむるに物として書院より  
はきりし書月廿八日の紙なりル  
月より書院よりはきてお載り  
まされびの書くはしとあり  
やまゝぬくて向戸ハらむら  
さしのみりしとゆへに四更え  
るに書をくまらむらむら  
たは月朗めりて家も白雲

五日

おとくなにあゆこの旅きくと  
したる屋をみよとて廣椽る  
くにならむやう其影ありくと  
あいらしきうてたえりやとよ  
とらうなり書我も今ハえぞたのむ  
々やのいしたるをいしたる  
あやのゆたる屋間あんとて  
書ありとらたたりとておま  
出あておのりよとておま

六日

くま  
くま  
くま

しものごころのちゆくまに賊のつく  
たふすこののしりやいやくそのりのおとに  
晋我もあつらさるるあつちまのこころ  
しらきえれハ厨の戸とさうちだまて  
あるドとくおまけたまをけたをせと  
とよみおゆる

七日

にてそ何よりあまのらいつあは  
かーりくるとのちものこまーとさ  
又白河の城を松平大和守なる家が

漂萍集  
飛蓬  
八日

に秋本五兵衛といふ撃劍者  
りくいさか主君のむしたあぐあど  
あて世を致し因をさうて名を  
酔月と何らあ能信をちあみ野路の  
際と歴たぐあぐこの真家族  
すりく漂萍飛蓬のちとく任どあ  
と定まをちあるとは月信のあねん  
はあも月信う家の奥のるにゆ  
いふるに廣樹のトにして光姫のまぐ

りんはつたのうたのうた  
 皮あかくあましのうたのうた  
 再々々々々々々々々々々々  
 びんぎんぎんぎんぎんぎん  
 ちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちん





九日

得たものの志のて得るより一足先  
 ものハ先とあて思ふより一又り出でて  
 又極く得るまにたつもあつと等閑な  
 るも得るのらふかたは<sup>布</sup>あつとあつと  
 するハあつとあつとあつと

梅津半右衛門尉ハ何れも家のコ、ウ  
 難波の役も<sup>正</sup>絶倫の者らとあつと何れも  
 感心もあつと名答に家しんハ捧禄  
 も一万余を領しつと此家の元老と

十日  
 捧禄ハ知行也



十一日

あつう能指をそのせし公勢のつとま  
其角の所を括いて其下とつう角の  
集りも句多し人あつはく武府を勤  
乃事卒て本國林田に歸らんとす  
角と別離をのりしをのりび角を  
將てしりんとす角をのりしをのり  
角の門くみ此系紅といふる能指光造  
のものをいひ角をめて其下に倍從  
して林田よりあらぬらん其下

十二日

と角と書信絶るふとあつうらん  
その中にめくし記文章の角のあみ  
あ起唇を暖を同しあといふし  
次はおうら此後句二三章といはけ  
さしその次の辰子曰らん何月某の日  
ハ多し 四十七士 式あるの 敵を夜討  
して七君のしらみと報ひせあふこ  
泉岳寺へ引りたり子其春春帆を  
あつた比類あつはくらん

十三日

西土ハげ日未我儿邊這みあれて風俗の  
壯士をいハワケて意氣感慨<sup>せむ</sup>甚<sup>し</sup>む  
書<sup>き</sup>け<sup>ん</sup>け<sup>ん</sup>や<sup>ま</sup>い<sup>し</sup>た<sup>た</sup>と<sup>ま</sup>い<sup>ふ</sup>こと<sup>を</sup>  
其<sup>中</sup>さ<sup>う</sup>は<sup>く</sup>秘<sup>花</sup>せ<sup>ら</sup>れ<sup>し</sup>や<sup>ら</sup>の<sup>あ</sup>り  
深<sup>見</sup>彩<sup>太</sup>郎<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>の<sup>何</sup>日<sup>安</sup>重<sup>賢</sup>も  
肥<sup>後</sup>さ<sup>ち</sup>の<sup>美</sup>重<sup>さ</sup>う<sup>は</sup>中<sup>少</sup>年  
を<sup>あ</sup>れ<sup>び</sup>蘓<sup>李</sup>の<sup>勘</sup>ち<sup>ま</sup>う<sup>ら</sup>う<sup>ら</sup>う<sup>ら</sup>  
新<sup>太</sup>郎<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>の<sup>好</sup>ま<sup>く</sup>丈<sup>草</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>李</sup>  
の<sup>角</sup>う<sup>ら</sup>い<sup>を</sup>と<sup>得</sup>お<sup>く</sup>お<sup>い</sup>て<sup>は</sup>ハ

十四日

え<sup>い</sup>い<sup>び</sup>お<sup>ま</sup>り<sup>お</sup>下<sup>せ</sup>は<sup>お</sup>下<sup>す</sup>の<sup>心</sup>を  
快<sup>く</sup>や<sup>そ</sup>甘<sup>み</sup>を<sup>と</sup>る<sup>を</sup>い<sup>は</sup>な  
年<sup>抱</sup>て<sup>淡</sup>く<sup>い</sup>ち<sup>に</sup>麦<sup>天</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>や</sup>  
浪<sup>花</sup>より<sup>秋</sup>田<sup>子</sup>行<sup>て</sup>き<sup>け</sup>く<sup>客</sup>居<sup>せ</sup>う  
丈<sup>草</sup>麦<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>に<sup>酔</sup>して<sup>又</sup>の<sup>心</sup>を  
麦<sup>天</sup>に<sup>い</sup>ら<sup>う</sup>た<sup>う</sup>を<sup>い</sup>は<sup>す</sup>麦<sup>天</sup>東<sup>都</sup>を  
柳<sup>系</sup>より<sup>負</sup>郭<sup>の</sup>地<sup>は</sup>や<sup>ら</sup>う<sup>ら</sup>う<sup>を</sup>  
い<sup>し</sup>め<sup>て</sup>住<sup>ら</sup>う<sup>ら</sup>う<sup>を</sup>い<sup>は</sup>す<sup>夜</sup>食<sup>に</sup>  
給<sup>ま</sup>る<sup>て</sup>い<sup>は</sup>す<sup>書</sup>盡<sup>き</sup>お<sup>ま</sup>る<sup>可</sup>い<sup>ハ</sup>

十日

たのみよるるまきよまをわらへてけり  
余ワくまの時さくわろさくをこひて  
轍の魚のくわいをかまけとくへて月並  
の能座をりや西よ東よ奔走して報  
一これえ巴人吏各を寥扣午寂るも  
りめとくくわれあつまるるれにのく  
草葎庵よあかもくろくをみ信ため  
たき能座とまきり麦天本意とくま  
たつとるてやえ然赤を味く門よ馬て

十六日

名を留心と更め万句の或まてんぬく  
文意の何とまきわらわらゆまの  
名なく諸侯の門も出入くおとす  
とまめりてされ留心改入意の情を  
謝免ふれたたの角かまを余よめら  
よ余日子の家長おやしたはまを  
青檀よいそたひゆる無聊のよこ  
りいやら隣てけさるをのち余と  
東都をきり留心とまきとるそのみ  
今誰かたに穢めらるやいとあつるま



了  
一  
一

右六先生師おぼしめし御自書也  
御筆也一冊中乃大句の  
はるまゝなりたあ乃冊子を  
中甲と稱し花押も刻し  
日毎に十卷にけり記す四巻の  
末病のあま其業はなほらに  
成るべしと云六頁に終るを

日赤の書は中にもあはすあま  
しむるて記しあかたし  
病や念ての存をおのむ  
記得のあまもたことな  
書はらぬく念はる者なき  
か其存はもくその系は  
あま抱のあま山とて終る

乃存其冊子也解之換卷て  
於神文多原乃音念を重く  
生師真蹟乃此也守る  
乙的田辰之佛坐の目  
目漢誌

大坂書林庶寫猷可堂藏版目錄

心さし後編めくら町筋八  
堀原忠玄清

七女子詩集 小本 一冊

發蒙書東式 三冊

真景 伊勢參宮名所志 六冊

同 掌故 三冊

尺牘ノシタメヤツ并ニ尺牘ニ用元熟字  
名宛名譽書式初幸知書等古之元

伊勢參宮名所志 六冊

下段ニテ詩ノ本文ヲ記シ上段ニ故事熟  
語ヲ大キ出シ出處ヲ註解ヲ加詩作便ス

傷害五法 五冊

繪本廿四孝 一冊

同註解 二冊

茶道七事式 二冊

繪本廿四孝 一冊

同國字解 二冊

千家且座花月の住持阿久いふ今  
廻りて度より礼茶とて茶茶三三の式副出

繪本廿四孝 一冊

同七律解 二冊

町見辨疑 西川氏 五冊

金石圖式 三冊

詩法授幼抄 小本 一冊

於人ハ漢の天文より別出也町見辨  
疑の術とて其も兼り其を具の書入

金石圖式 三冊

絶句律平仄位置圖ノ三詩作ヲ示ス  
ニルベキヲ示シ熟語ヲ示ス

三界一心記 心子の 一冊

茶切適 抄本一箋

芥子集 詩聯書全 一冊

将基指覺抄 小本 二冊

農家心得草 抄本一箋

詩對類語 同 全 一冊

在正上の子のころを合文と云ふは  
耳打の根は名人の定規拍響を知りむ

農家心得草 抄本一箋

詩家法語 熟字全 一冊

神代古訓抄 無

狂歌芳分船 園景一冊

書目録

和歌桐火桶 室五 二冊

新元法 其村著 月漢西 一冊

其村の身より日次奉句法小竹脚の性談  
雑法抄の二画ハ新として面々を圖し

むすねの歌句解 著 兼業 二冊

おきな一世の歌句のころ初めのことし  
がくを句をむろのてきまぢうのてきまぢ

同拾遺 二冊

右よりなる歌句をくくくあめて  
没定をてて没定をてて没定のてて

其角雜談 二冊

宗徳をよもは能人の侍系 枕巻の心はあ  
てててててててててててててててて

同元系 四冊

善子二世のころの改元ありて時くそ  
ててててててててててててててて

同元系 四冊

同元系 四冊

俳諧小づち 小舟 一冊

四季門形を季考を種切字境紙  
冊百餘枚の式并俳諧の流調を思

同本 七代全 一冊

四季を二月と部を分りて  
甚ど及せりしむ

同四季歌 二柳全 一冊

四季を四段に分りてその内を去りて  
都をこころしつるを大をたのむ

同拾遺 同人著 全 一冊

那をよもは能人の侍系 枕巻の心はあ  
てててててててててててててて

同小休 槐全 一冊

養徳風を季の世の通月小海を  
ててててててててててててて

同秘傳抄 全 一冊

四季をよもは能人の侍系 枕巻の心はあ  
ててててててててててててて

歌水発句集 四季の句と 二冊

其村の身より日次奉句法小竹脚の性談  
雑法抄の二画ハ新として面々を圖し

其村の身より日次奉句法小竹脚の性談  
雑法抄の二画ハ新として面々を圖し

其村の身より日次奉句法小竹脚の性談  
雑法抄の二画ハ新として面々を圖し

其村の身より日次奉句法小竹脚の性談  
雑法抄の二画ハ新として面々を圖し

其村の身より日次奉句法小竹脚の性談  
雑法抄の二画ハ新として面々を圖し

其村の身より日次奉句法小竹脚の性談  
雑法抄の二画ハ新として面々を圖し

其村の身より日次奉句法小竹脚の性談  
雑法抄の二画ハ新として面々を圖し

其村の身より日次奉句法小竹脚の性談  
雑法抄の二画ハ新として面々を圖し

其村の身より日次奉句法小竹脚の性談  
雑法抄の二画ハ新として面々を圖し

其村の身より日次奉句法小竹脚の性談  
雑法抄の二画ハ新として面々を圖し

其村の身より日次奉句法小竹脚の性談  
雑法抄の二画ハ新として面々を圖し



